鏡塚発掘調査報告書

昭和42年10月1日

飯田市教育委員会

N000
H001
1

序

国道151号線のつけ替工事が飯田市竜丘桐林の塚原古墳群を通過する工事を始めることになつた。

飯田市教育委員会は長野県教育委員会の指導および飯田建設事務所（長野県土木部）の協力によりこの道路敷となる古墳・埋蔵文化財包蔵地の発掘調査をすることになつた。

飯田市教育委員会

報告書執筆者

鏡塚発掘調査団長　大　沢　和　夫（飯田市松尾2110番地）

（飯田女子短大助教授）

（長野県考古学会長）

1. 遺跡としての種類、員数および名称古墳、名称鏡塚
2. 発掘した土地の所在　　飯田市桐林２８８４番地
3. 所有者の名称　　長　野　県
4. 当該土地の範囲

桐林2884番地の鏡塚直径45mに及ぶ円墳であるが、今回発掘したのは国道の道路敷となる長さ20m巾10mの範囲である。

5. 発掘届出者の名称及び代表者住所氏名

飯田市教育委員会　　代表者　教育長　矢亀勝俊　　下伊那郡高森町下市田

6. 発掘担当者の職氏名

日本考古学協会会員　長野県考古学会会長　　飯田女子短期大学助教授　大　沢　和　夫

7. 発掘の目的

国道151号線のつけかえ工事により、鏡塚の西端を削りとることに決定し、その工事が始まろうとしたので、破壊される以前に発掘をしようとした。

8. 発掘の経過

鏡塚は直径45m、高さ2.5mの低平な円墳で、大部分は牧内正七氏の所有の桑畑である。今回国道151号線のつけかえ工事を行なうため、その西端200㎡の地を長野県土木部で買いあげた、その買い上げ終了の部分だけを発掘することにした。

発掘の経過日誌

- 昭和42年6月6日　発掘担当者大沢は現地を視察
- 6月11日　第一次発掘　発掘参加者は次の通りである。

調査団長　大沢和夫

調査団員　佐藤甦信、今村善興　塩沢仁治、木下平八郎、宮下勝美、神村　透、宮沢恒之

調査応援者

飯田女子短期大学学生　6名
下伊那農業高校生徒　9名
飯田東中学校生徒　1名

その他

飯田市教育委員会　渡辺亮蔵
飯田教育事務所　宮下之宏

人夫　3名使用

この日は暑い日であったが、調査は進み、葺石列の様子や、墳丘がなだらかの傾斜であるが、その裾は80cmの高さの石垣で終っていることを明にし、数百片に及ぶ埴輪円筒片を採集した。

- 6月12日　宮下勝美が墳丘の追加実測を行なった。
- 6月18日　木下平八郎と宮下勝美伴信夫、人夫3人が残っていた部分を発掘した。この際須恵器片を発見した。大沢和夫も午後発掘に従事し、多くの埴輪円筒片を採集した。

（上　写真1　　下　写真2）

- 6月20日　飯田市社会教育課長○木下隆、木下平八郎、宮下勝美と視察
- 6月23日　木下平八郎、宮下勝美、宮沢恒之、伴信夫、宮川美佐雄、人夫3名追加発掘
- 7月30日　第二次発掘

国道に並行して農道を作ると決定したので、第一次発掘の線より1.5 m東まで発掘調査することにした。発掘参加者は次の通りである。

調査団長　大沢和夫

調査団員　木下平八郎、宮下勝美、今村善興、小林常治、神村　透、遮那真周、宮沢恒之
人夫5人

当日は国道工事に来ていた吉沢工務所のブルトーザーの応援を得て不要の土砂の取除きに能率をあげたので調査は進捗した。前回の発掘調査の際本古墳が前方後円墳ではないかとの疑問が起ったので、その糾明に志ざしたが、前方後円墳でないことが明にされた。墳丘裾に石垣のあること、埴輪円筒片が多く発掘されたことは一次発掘の時と同じであるが、埴輪円筒は二段に建てられていたらしいこと、円筒と円筒との間隔が60cmであったらしいことが破片の発掘状況より考えられた。

9.　発掘の実況

昭和42年6月11日、いよいよ発掘調査にかかることとなった。まづ調査員及び応援参加一同集まって大沢団長よりの指示を聞いた（写真1）後、4つの班にわけてそのうちの1班は墳丘の測量にあたり、他の3箇班は発掘を開始した（写真2）。墳丘の高さは2.5 mで低いものであったが径は45mに及ぶ大きいものであった（写真4）。発掘の進行して行くにつれ葺石が現われはじめ、所々より埴輪円筒の破片が発見されて来た。やがてそ

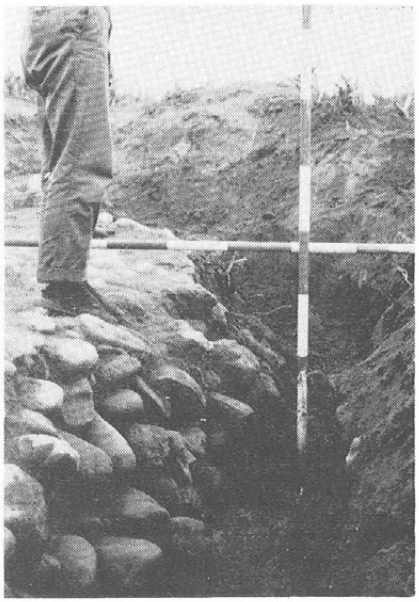
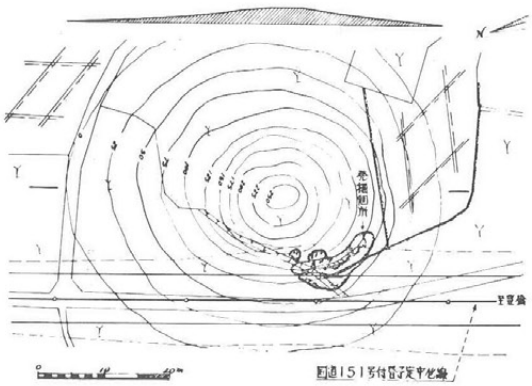


写真3

写真4



塚原四号墳（鏡塚）実測図一縮尺図示一

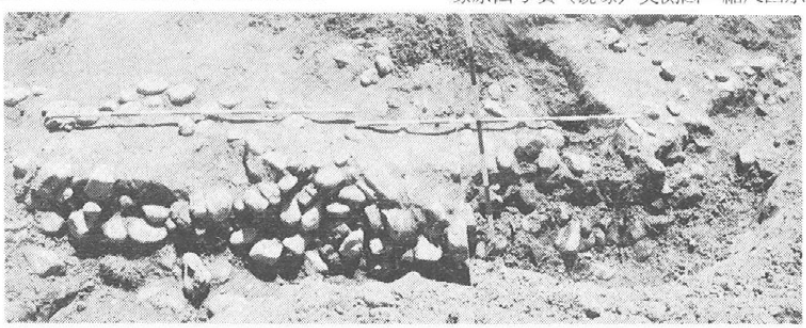
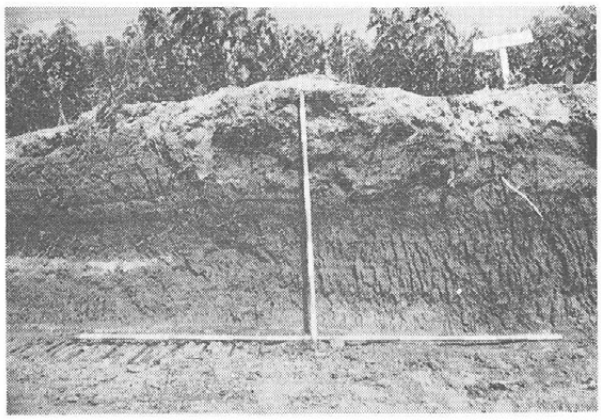


写真5　　鏡塚古墳の裾の石垣　　42. 6. 12　　（宮下勝美氏撮）
測量ポールのおいてある所は葺石で、その下部に石垣が見える。ここが地中より掘り出された古墳の裾である。右の方は後にこの石垣の内部に何かないかと掘った試掘穴である。したがってその石垣は崩されている。

の葺石が石垣の形をなして終っていることがわかった。（写真５）これが墳丘の裾であった。石垣は地山より築かれ、内へ65°位の傾斜を示していた。（写真３）　石垣の内部に何か構造は無いかと思ってピットをあけてみたが何も発見できなかった。（写真５）

７月30日第二次の発掘をした。前回の発掘の際本古墳は前方後円墳ではないかという一部の疑問があったが、地主の関係で発掘できなかった今回は発掘の範囲が広まったので、応援に来たブルトーザーの力を借りて発掘を進めたが、前方後円墳でないことが確認せられた。なお墳丘の断面を出すようにブルトーザーの力を借りたが墳丘の端であるため、内部構造を知る何らの手がかりも得られなかった。（写真６）

写真６



10．発掘した埋蔵文化財の概要

今回発掘したものは墳丘の西端の一部で全体の８分の１位の面積にすぎないので、石室等には（もしあったとしても）発掘が及ばなかったので、さしたる発掘遺物は無かったが次のものが出土した。

埴輪円筒片　2000個に及ぶしかしいづれも赤褐色の小破片で断面を見ると砂利等を含み粘土は精選されていない。最大のものも長さ20cmには及ばない。しかし厚手（1.2cm）のものも薄手（0.9cm）のものもあり、色調も異なっており、製造場所が一個所でないことは分った。（写真８）

復原してみると直径37cmにも及ぶものがあるので、高さも１m以上のものもあったと考えられる

形象埴輪片

それの一部ではないかと思われるもの二片発掘された。（写真10）

須恵器片

厚さ0.4cm～0.6cmの破片が数個発掘された。断面は白灰色で表面に灰釉が施されている。瓶の頸部である。

土師器片

数個発見された。

11．発掘した埋蔵文化財に対する処理

今回発掘したものは2000個に及ぶ埴輪円筒片が主たるものであるが、飯田市教育委員会では整理用の箱を製造したが、今の所保存場所がないので下伊那教育会の資料館に委托して保存して貰う予定である。資料館は鉄筋コンクリート２階建の耐火建築であるから。

12．発掘に対する発掘担当者の考察

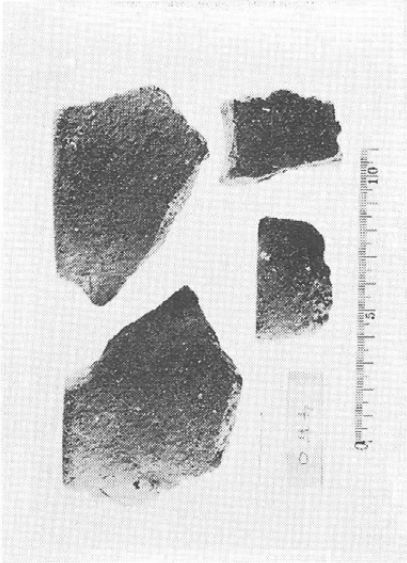
前述の如く今回の発掘は墳丘の一部を発掘したにとどまったが、この鏡塚は盗掘が行なわれたかどうか明でない。もし将来本古墳の墳丘の頂上あたりが住宅、工場等の建築によって万が一破壊されるようなこと（是は可能な限り阻止しなくてはならないが）が発生した場合には、石室の破壊も考えられるので十二分の日時をかけて発掘調査をその以前にしなければならない。

13．その他参考とすべき事項

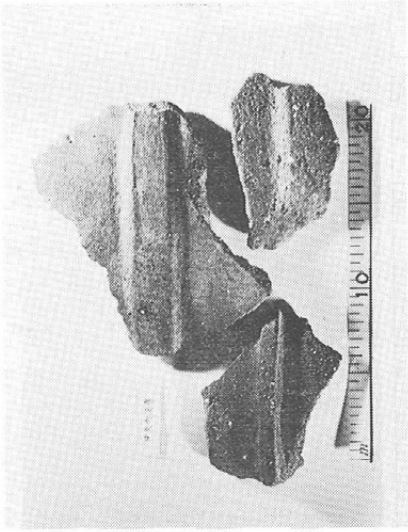
第一次発掘の状況については次の文献がある。

大沢和夫　鏡塚を掘る（伊那1967年８月号）

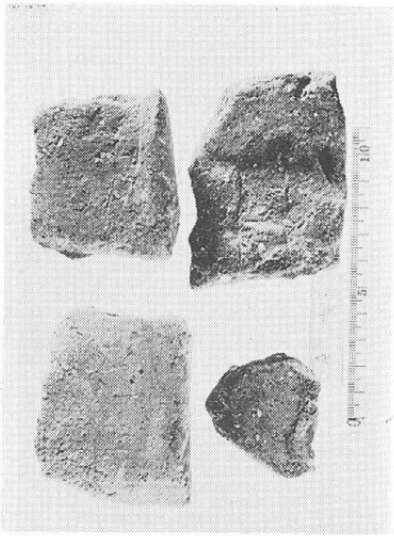
埴輪円筒口縁部　写真７



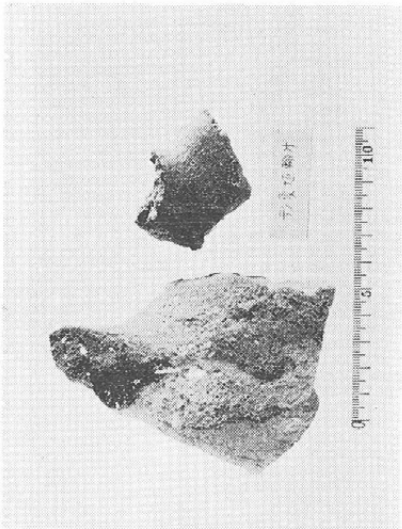
埴輪円筒凸帯部　写真８



埴輪円筒底部　写真９



形　象　埴　輪　写真10



鏡塚を掘る

大沢和夫

○

川路付近を飯田線で通過する時山よりに白いガードレールが見える。是か新しい国道151線号である。この道を北の方へ延長して開善寺の裏を通りホツキの難所を避けて毛賀沢橋へつなぐ新しい道をつくりつつある。即ち国道のつけかえ工事である。その道が本年いよいよ桐林の塚原古墳群を通過する工事を始めることとなった。それで飯田市教育委員会では県教委と連絡をとりこの道路敷となる古墳や埋蔵文化財包蔵地の発掘調査をすることになった。

○

さて今回調査したのは飯田市竜丘桐林2884番地にある鏡塚である。このあたりは塚原といい、その名のとおり、前方後円墳の双子塚をはじめ鎧塚・鏡塚その他十数基の存在したことは下伊那史第2巻471頁以下に記されている。この中て鏡塚は大きさから言うと5本の指に入るべき大切な塚であって下伊那史には「封土の全面は畑となった。径東西26.1米、南北22.2米、高さは東側4.4米、西側3.2米の円形封土を残存するが南面の封土はかき崩されており、その面と西麓とに石垣をつんである。竪穴式の石室であったらしく、その石は土どめのため丘裾の周囲につかわれたということである」（塚原3号墳）と記されているが、第4号を鏡塚としてあるのはあやまりである。新国道がこの塚原を通過するごとになったと聞いて私は大へんなことになった、もし双子塚でも崩すことになったら、たとえそれがどんな理由であっても絶対にその道路コースには反対しなければならないと決心した、道も大切であるが双子塚こそ更に大切な日本人の文化遺産なのでしかし幸に県土木部でもこの文化財の価値を考えてなるべく塚と塚の間をぬって通るよう道の設計をしている。その点有難かった。しかしどうしてもこの鏡塚の西端を通らねばならないことになって墳丘の20分の1位を削りとることとなった。まごまごしていてブルドーザーが来てしまえば一たまりも無く崩されてしまう塚である。ブルさんの来る前にとにかく学問的に調査しておきたい、でないと私達考古学に志す者は寝てもねむられない。こうした事情を飯田市教育委員会でも察知して、とにかく緊急に発掘調査をすることになりその仕事を下伊那考古学会に委嘱して来た。

この塚は以前にもたびたび行ったことのある古墳で、大きい割に高さの低いものであり、鏡塚という名のあるのは鏡の出たためにつけた名で既に誰かが以前に発掘したものと考えていた。それでもと思って6月6日に現地に行ってみた。塚の上にはまだ桑が残っていた。道路敷になるのはどの部分か、どういう方法で発掘したらいいかなど一人で考えた。道路敷になる所は県土木部の所有であるが残った墳丘は牧内正七氏の所有地なので、帰りに牧内氏を訪れ発掘のことを報告し桑を伐るよう依頼した。

○

6月11日　晴　午前9時に現地に集まった。調査団長に大沢がなり、調査員には下伊那考古学会の会員があたることとした。今回は飯田女子短大の郷土クラブ員6名と下伊那農業高校の郷土班員10名、そのほかに人夫3名が応援に来てくれた。

発掘するのは道路敷として県土木部が買収ずみの部分だけで面積30㎡位であり、古墳全体よりみると20分の1位の小面積の部分であるが、作物補償もいらないし、発掘後復旧する必要もない。道路にするのだからブルトーザーが平坦にしてくれるから、その点楽な発掘である。

班を3つにわけて、佐藤甦信君が第1トレンチ、今村善興君が第2トレンチ、木下平八郎君が第3トレンチの主任として下農生を指導して貰う。宮下勝美君が女子短大生を助手にして古墳の実測をはじめ、宮沢恒之君・塩沢仁治君・河合啓三君には記録係として記録をとったり出土品の保管にあたることを依頼した。

暑い日ざしとなったが時折雲が出る。風があるので比較的しのぎやすい。第1トレンチより葺石らしいものが現われたというのが9時35分、間もなく第3トレンチでは表面より20㎝下から埴輪円筒の破片が発見された。その後所々より葺石や埴輪片が発見された。20×10㎝位の比較的平たい感じの河原石を並べたもので墳丘全面にあるのではなく所々に残されているという様に見える。最初から所々に葺石を置いたものか、は

じめは全面的に葺石をしいて封土の崩れるのを防いだのであるが、後の耕作や桑の植栽その他の事情で大部分がとり払われてしまったものか、是は結局本日のの発掘では最後まで未解決の問題として残された。

飯田市教育委員会の渡辺さん、飯田教育事務所の宮下さんが来る。地元の竜丘の方々も見学に来る。11時半一息入れて発掘を続ける。土がなかなか堅くて困難である。11時10分第1トレンチで葺石が上下二段ある表面より55㎝下に葺石があり、それより少し高い位置に葺石がある、どうも階段状に葺石が葺かれているという見解である。第3トレンチでも似た形で葺石が見つかったが、こちらは一続きのものが途中で失われたものと考えられたので、よく調べると二個所の葺石は一つづきになり傾斜は17.5度となっている。第1トレンチのもそれと同じではないかと思って上下のを結んでみると傾斜は同じ7度半。かなり緩い傾斜である。そしてこの傾斜をそのままのばすと頂上へつながる。

最初この塚を見た時に、面積が大きいのに比して高さが低く、この古墳はもとは高かったが掘り崩されたのか風雨の侵蝕で低くなったのかとも思ったが、この葺石の傾斜より考えると最初から大きく低い古墳であったと考えられる、すると本古墳は未発掘ではないのかとも考えなおして来た。ではこうした緩い傾斜の古墳は古い型式なのか新しい型式なのか。今のままでは何の決め手もない。

○

ひる休みに下の家まで水を貰いに学生らが出かけた。やがてお湯と茶椀を持って上って来た。下の原田さん方でわざわざお湯をわかして茶椀まで貸して下さったのである。縁もゆかりも無いのに有難いことであった。

1時発掘再開、暑い日射しとなった。第1トレンチと第2トレンチの間の発掘を行なうと同時に第2トレンチを西の方即ち墳丘の裾の方へ延長した。17.5度の傾斜で葺石がずーと続いている、そして所々より埴輪円筒の破片が出るが、不思議なことに葺石の下からもそれが出ることである。葺石の間に埴輪があってそれが何かの関係で深くなったものであろうと思いながら発掘する。そのトレンチの延長したあたりで土の色が変っている所があるのでこのあたりが墳丘の裾であろうと推定した。（これについては後の所を見ていただきたい）

午後2時10分第1トレンチでは葺石と粘土の段とで階段状になっていると佐藤君より報告があった、はたしてそうなのか、この部分だけではイエスともノーとも言えない。太陽は暑い、調査員の顔や腕が赤く日にやけて来たのが目につく、若い学徒らにも疲労の色がかくせない。このあたりで今まで地表に露れた葺石の撮影をすることにした。信毎・中日・毎日の記者が来た、丁度いい。箒で人の足あとをはき消し、ブラシで葺石の面を磨き、桑の根を切り、美しくしてそこへカメラを向ける。これで本日の仕事の山を越したと考えた。

○

葺石の撮影が終了して、では葺石の下には何もないだろうかと思いながら葺石を起しにかかった。午後4時であった。ところが、ところがである。葺石の一番西側に並んでいるものを起したところ、その下にも石がある、またその下にも石が見出される。疲れた調査員が急に元気が出てきて石の外側を掘りはじめた。今までの葺石の出た土は堅かったのに、今度石の列の外側を掘ると土がやわらかい。どんどん掘り下げるうちに葺石の最後の所が丁度石垣のように石が上下に並んでいることを発見した。それらの石も葺石より少し大きく25×15㎝位のものが多く、しかも長径を奥の墳丘の方へ向けている。石垣である。石垣はどの位下より積まれているかを調べようとしてその軟い土を掘り下げること75㎝で遂に黄色土に達した、ここは堅い、即ち地山である。古墳を築く前の地表面に達したのである。そして石垣の傾斜は60°～65°で勿論内側より外側へ傾斜を持っているのである。宮下君の測量によればこの地山の面はこの塚の西を走っている道路より11～30㎝低いという。しかもこの石垣は大きく弧状をなしているのである、勿論墳丘の頂点を中心とした円弧の如き形をなしているのである。

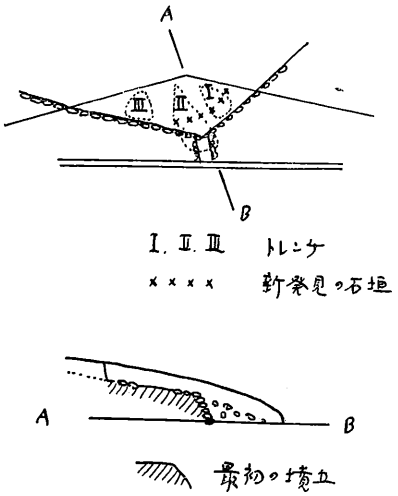
私はこの石垣こそ本古墳の裾であると思った。ゆるやかな傾斜をもった墳丘がここで急に石垣を作って終っている。こんな形をしていると考えた。（第2図）

○

午後5時になった、応援に来てくれた学生生徒と雇った人夫とを帰らせてあと数人となった。

この時私は変な見方をしてみた。たしかにこの石垣は古墳の裾であろう。しかしことによるとこの石垣は

第２図



石組の石室の如きものの一部ではないかと。一般に石室は古墳の中央に作られるが、時によると一古墳に二石室のある場合もある。主人の竪穴式石室を設けた古墳の一隅に身近のものの小さい竪穴式石室の設けられる場合だって考えられる。そう思ってみるとこの石垣が疑問になってくる。夕方近くなって調査団員も減ってしまった。次の日曜日まで待っていたらブルドーザーが何をするか分らない。

調査員でどうするか相談をする。やろう一とにかくこの石垣が古墳の裾ならそれでいい、もし石垣の中に石室か何かがあったらその時はそれで発掘方法を考えよう。下農の生徒がやりましょうという。そこで葺石の一部をはねのけて石垣の直角の方向に幅30㎝位のトレンチを掘りはじめた。下に室でもあるか、あれば面白いし、なければそれでいい。生徒の掘り進むシャベルを見つめていた。55㎝まで深く掘げ下げたが何もない、上の方と同じ赤土層ばかり、石垣はやはり古墳の裾であった。

○

今村君が第２トレンチの延長部で葺石の下に埴輪円筒片の出ることに注意して不思議だと言ったことが是で理解された。墳丘の西端の低い葺石と思ったのは、墳丘表面にあった葺石の落ちこんだもので（それが自然的か人工的かはとにかくとして）石垣の外へ表面の傾斜の延長のように埋まっていたものであった。第２図下図参照）その葺石とともに埴輪が落ちた、だから石の下に埴輪片が出るわけである。考古学研究というものはこうしたことが多い。したがって無駄の仕事もあり、最初の予測と大きくちがうことも多い。それでいいのだ、こうして学問が進むのだから。

石垣は大きく弧状をなしている。西の道に面した部2,5ｍはほゞ直線になっているように見えるがやはり弧である。この弧の中心を求めれば古墳の本来の大きさがわかる筈である。目測したところ直径30ｍの円墳らしい。それで石垣の間の土を落し、ブラシで石の面を清掃して撮影する。石垣の外はもとの隍のあとかも知れぬが今日の時点では何とも言えない、前に述べたように地山が石垣の底の面よりあらわれたので隍はなかったのかも知れないが。

大体発掘も日の暮れそうな時に大切なものが出土するのが下伊那考古学会の発掘の恒例である。今日もやはりそうであった。

○

木下君は一人熱心に石垣の外の石の間から埴輪円筒片のこなごなになっているものを発掘している。私は石垣の弧の上を歩きながらしまったと思った。発掘のはじめ畑と畑の境界であるので後の人の築いたものとして無雑作にとりはづしてしまった石垣のことに思いついた。地表に出ていた境界の石垣と今地下より掘り出された石垣とが弧状に連続できるではないか。そのことを帰りぎわにやっと気づくとは！……あの境界の石垣は最後まで残しておくべきであった。申し訳ないことであった、学問に対しても調査員に対しても。こうした石垣は必ずこの古墳をとりまいて土の下に埋もれているであろう、それを正確に掘り出したら古墳の真の姿がわかる筈である。しかしそれは第二期の発掘でなければわからない。

○

６時20分、夕暮近くになって墳丘の頂上に立って今日の発掘をふりかえってみた。

1. このままにしておけば一たまりもなくブルドーザーでやられてしまうこの遺構がとにかく調査でき記録保存できたことはうれしい。もし知らぬうちに削りとられたら永久に残念だったという心持が残ったであろう。
2. 墳丘はなだらかな傾斜で、裾が80㎝の高さの石垣で終っていたことがわかった。
3. 葺石の配例の一部が明になった。
4. 埴輪円筒の破片は多くあった、重量にして４瓩以上もあったが、原形のわかるものは一個も出土しな

かったし、その配列が墳丘上どうなっていたかは今日までの所では明らかにされなかった。
今私の立っている下には多分石室があるだろう、それが竪穴式のものか横穴式のもの（下伊那にはこの方が多い）かはわからないが、多くの副葬品に囲まれて古墳の主が眠っているのではなかろうか。

もしこの国道が全通した頃、なるべく今のまま残したいのだが、この古墳を平にして工場か店を作る時が来たら、その際には前以って十分の用意をととのえて発掘調査しなければならない、それが先祖に対する我々のつとめであろう。　　(42・6・13)